

Title	歴史と理想
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.2 (1928. 2) ,p.187(1)- 200(14)
JaLC DOI	10.14991/001.19280201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280201-0001

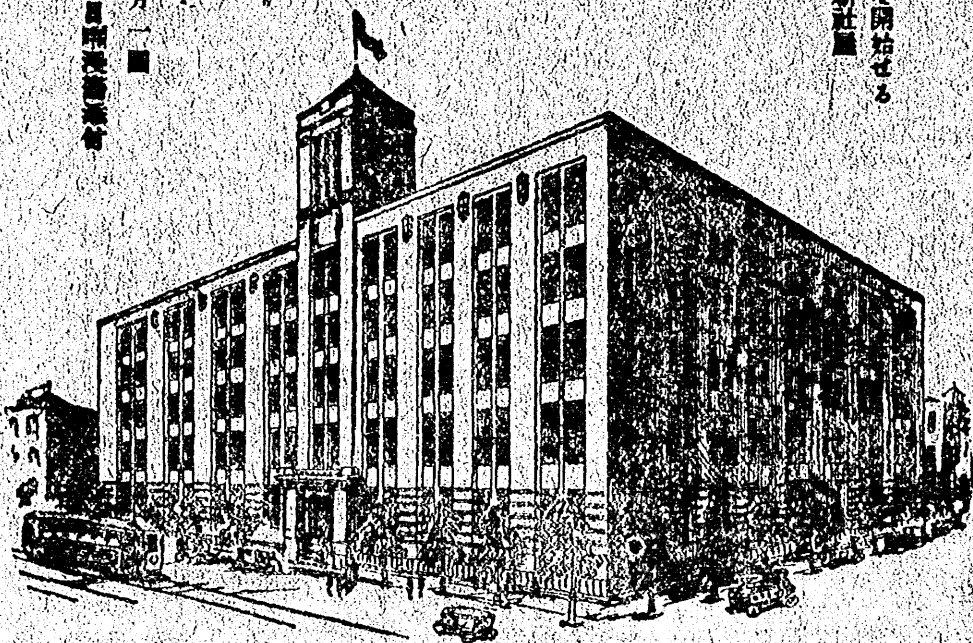
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の 一 本 日
報 新 事 時

△ 購読を開始せよ
本誌新社編

△ 購読
定額月一圓
各所の新聞販売所



◇ 端 濠 お 内 の 丸 ◇

三田學會雜誌 第二十二卷 第一號

歴 史 と 理 想

瀧 本 誠 一

歴史と理想とは實際多くの場合に於て反對の作用をなし、相互に牽制しやつて、各々其の効果を收めつゝあるのである。今茲に此の事を論述するに當りては、先づ最初に誤解を避くる爲めに余がこゝで歴史と云ふのは何を意味するか、又理想とはどんな事を意味するかを、明かにして置くの必要がある。

歴史とは二つの意味がある。學者が書物に過去に於ける事物の變遷を書いたものを歴史と云つて居る。それは書いた書物そのものを指して云ふので、例へばグロートの希臘史、モムゼンの羅馬史、マコーレーの英國史、司馬遷の史記、水戸の大

日本史等皆歴史である。又他の意味は書いた書物でなく、過去に於ける事物の變遷其の事を稱するので、例へば我が日本の皇室は開闢以來連綿と光輝ある歴史を持つて居るとか、英國の憲法は複雑した歴史を有して居るとか、あの會社は歴史が新らしい、この商店は古い歴史があるなど、云ふ場合である。此の場合の歴史は書いたもの、有無に拘はらず、過去の事實の變遷沿革を指して云ふのである。

余が本論に歴史と云ふのは此の第二の意味に於ける歴史であつて、學者の書いた書物ではない、個人に就て云へば、其の人の經歷傳記であり、商店に於ては古きのれん、しにせは其の店の歴史であり、門地家柄は其の家の歴史である、又社會國家に就て云へば其の社會若くは其の國家が過去に辿つて來たあらゆる閱歷は其の社會其の國家の歴史であるが、本論の歴史はこの意味の歴史である。

又余が理想と云ふのは常識を有する者が自分の見識を以て道理上若くは正義上斯くあるべき筈である、箇様にしなければならぬと信ずる者を云ふのである、即ち約言すれば其人が自ら合理的であると認めて居る思想を云ふのである、然しながら眞に合理的であるか否らざるかは、神の外何人にも判らない筈であるから、

唯た其の理想の持主が、これが合理的であると思ひ信じて居るならば、それが其人の理想である、勿論學者や識見家の理想と、普通人間の理想とは、世間的の價値に於ては固より大なる差異がある様なれども、實は堂々たる大學者大識見家の理想でも、丁稚小僧の理想でも、理想其のものとしては、何等の違もないのである、王侯貴人の立派な着物でも、乞食非人のぼろ着物でも、着物としては着物に違はなく、富商豪農の大廈高樓でも日雇水呑の貧しき小屋でも、住家としての住家には全然違はない、夫れ故に理想其のものとしては、何人の理想でも、理想に差異はないのであるが、余が今此の論文中に理想と云ふのは學者や識見家の理想を云ふのであつて、尋常普通人の理想を云ふのではない。

さてそこで歴史と理想とは如何なる關係を有するかと云へば、余の見るところでは、歴史は悉く理想に依つて作られ、理想は皆歴史に基いて居るのである、理想なくして歴史はあられず、歴史がなくして理想はあられない、歴史と理想とは人間の腦力と體力との關係に同じく、腦の働きが體の作用となつて現はれ、體の作用は又腦の働きを左右するのである、此の兩者の關係は、*a*が*b*の原因であると同時に、*b*も亦

a の原因である云ふ相互關係である、a が b の原因である、b が又 c の原因となると云ふ承繼關係ではない。

然しながら右に述べた所は、一般概括的に歴史と理想との關係を示したゞけのことであつて、若し具體的に個々特殊の場合に就て此の二つのものゝ關係を考察するときは、常に相互に背馳して矛盾衝突を免かれないのである、理想が淺薄にして其の性格が低ければ低い程、歴史と調和するも、それが遠大にして、高ければ高い程、歴史との距離が遠ざかるのである、社會の進歩發達に従ひ、人間の理想は益々複雑高尚に赴きて、先へ先へと進んで行くが故に、歴史上の批判を以てしては、逆も考へ得られない事柄まで容易に考へ出して、現社會に實現せしめんと試むる者さへ顯はるゝのである、世上に所謂る哲學者、思想家など云へるものゝ多くはそれであつて、彼等の主張する所は、實際とは甚だ遠くして、到底今世に實現することの出來ないと思はるゝことが多いのである、夫れ故に實際目前に行はるゝ事を目的とする政治家等は、彼等を輕蔑して、社會國家の爲めに何等の用にも立たない屑物の様に考へ、有名なるフリードリッヒ大王をして、余、今余が一州を破滅せんとすれば哲

學者に其の政事を一任すべしなど、叫ばしむるに至つた所以である、然れどもそれは全く理想の效用を知らないから、こんな言を云ふのである、元來理想は直ちに實際に行はるゝのが、其の效用ではない、理想は理想として實行は出來なくつて差支へないのである、學者や、識見家の持つて居る理想は必ずしも現在に實行を期するものではない、若し其の一部分でも片端でも、實際に用ひらるゝ機會があつたならば、それは其の社會の爲めに一つの僥倖であると云はねばなるまい、前に述べた如く理想は高尚なれば高尚なる程、歴史に遠ざかつて行くものなれば、學者や識見家の理想が目前に行はれないのは寧ろ當然であつて、それが理想の誤りではないのである。

一體理想の效用は破壊であつて、歴史の效用は保守である、破壊は理想の必然的特質ではなく、保守も亦固より歴史の必然的特質ではないのであるが、而かも一般の傾向として歴史の保守せんとするものを理想が破壊して行き、理想が破壊せんとするものを歴史が保守するのである、一方が突破らんとする矛盾あれば、他の一方は防ぎ守らんとする楯である、矛と楯とは全く反對の效用を有するものな

るが、現在の人間社會は此の二つの道具が無くてはならない様に仕組まれて居るのであらう。

歴史には勿論過誤がないとは云はれない、それは書物に書いた歴史に間違つた事實が記されてあると云ふことではない、或る時代に行はれた歴史的现象の全體が不合理であり、非人道であり、若くは又其の一部分が正義に反し、道理に背いて居ることがある、例へば奴隸制度の如きは歴史上何くの國にも行はれて居つた最も著明の現象なるも、其の制度の根本からして正義人道に戻る悪制度である、又十八世紀末より今世紀にかけて歐米の文明國に跋扈を極めつゝある資本主義は、全然悪制度であるとは云へないが、其の一部分は確かに缺陷を示し、多大の弊害を醸して居ることは明かである、故に歴史的に傳來する是等の過誤缺陷を指摘し、破壊して更らに改造を要求するは理想の本分である、左すれば理想は皆正しいか、過ないかと云へば勿論必ずしもさうではない、如何なる大學者、如何なる大識見家の理想でも、常に正しいとは云へない、過がないとも云へない、彼等の得意とする理想が何等合理的の基礎を有して居ない架空の妄想に過ぎなかつたことも、事實あつたの

であるから、長く歴史的存在を持続して、一般に承認を得たる或る立派の制度が、此等の妄想の犠牲となつて破壊せられた實例も亦乏しくないのである、斯くの場合には何人もこの妄想の犠牲を免かれて秩序の維持を冀はざるものはないのである、故に歴史の誤は理想が之を正し、理想の過は歴史が之を矯めて、相互に其缺點を補充して行けば、其の社會は健全なる進歩發達を遂げ得らるゝのであらう。

然るに茲に一つの不可思議なることは人間社會は何故か何くにも殆んど例外なしに歴史を崇拜し、歴史を尊び歴史を重じ、歴史の前には常に三拜九拜して、容易に忠義を誓ふが如き事實がある、即ち歴史に立脚する事物は、善かれ悪かれ、一切之を是認すると云ふに至つては甚だ謂はれなき迷信の種類であつて、是れが或は人間の天性ではなからうかと疑はるゝ程である、葡萄酒は年代が立てば立つ程價格が増加して來るのである、成る程葡萄酒は長い年代を経るに従つて段々と其の質が善化して、古ければ古いだけ、良くなつて來るのであるから、古い歴史を有するのを尊重するは聞へたことである、併しながら人間が歴史を崇拜するのはそんな道理に基づけるものにあらず、只た何となく古くさへあれば、それに向つて心から

自然に崇敬の念を發するのである。

人間が歴史的動物であつて過去の歴史にあこがれる癖を免がれないのは、或は祖先崇拜の一つの形式かも知れないのであるが、兎に角社會のあらゆる方面に此の癖の印象を留めて居ることは明かなる事實であつて、吾人の平素の用語が既にその事を證明して居る、舊章に率ふ、舊國を憶ふ、舊格を守る、舊家を重す、舊盟を尋ぬなど云へることは、皆歴史を崇敬するの意味である、古風、古色、古雅、古調、古道、古法、古制、古典、古拙、古愚、古狂など皆古を慕ふの意である、尙其他好古、尙古、稽古、師古、訪古、希古、仰古、温古、汲古など算へ來れば殆んど際限もなく、現に好古なる語を慕ふて自分の名稱に此の二字を用ひて居る學者は余の知つて居るだけでも具原好古、樂軒、藤井好古、貞幹、仁井田好古、南陽、蒞戸好古、堂、太華、仁科好古、白谷等を始め二十一人もある、前に記した古愚も柴野栗山先生の外、牧信侯、百峰、遠藤通、白鶴齋、牧野直卿、黙菴等皆之を用ひ、古狂も賴三、樹三郎の外に近世森春濤翁も此の號を用ひて居られたが、是等の諸先生は皆馬鹿でも狂氣でも古色を帯びて居れば、それで宜いものと敬慕せられたこと、思はる。

歴史の崇拜は日本や支那に限つたことではなく、西洋人の様な理想に長けた國民の中にも矢張無意義に過去を有り難がる連中が多いのである、中世紀時代のギルドが其の規定を制定するときには、何時でも其の規定の前文に「市の昔時よりの慣例に準じて」云々の文句を挿入して、一般の信認を確かめることを勉めたのであるが、今日現に倫敦の市長が英國王と並んで座席を占め、國王でも市長を左右することの出来ない程に威張つて居るのも、全く歴史の力に過ぎないのである、それと是れとは事變はれどもカーライルのヒロウ、ワーシップも、其の實は單に歴史の崇拜に外ならざること、明かである、數年前倫敦の新聞にベーコンの齒、ナポレオンの頭髪などが何十萬磅と云ふ巨額の價格に賣買されたことが掲げてあつたが、是等の事實も亦畢竟する所、歴史に對する同一思想の淵源より發した珍現象に過ぎないのであらう、日本の荻生徂徠と云ふ人は、中々理窟ばい理想家であつたのであるが、それでも其の著作「なるべし」と云ふ書の中に「黄蘗派の寺は支那風なれども古に遠い、眞言、天台の寺は日本風なれども唐より傳來の古法多し」と云つて居るが、これで見れば此の老も亦カーライルなどと同じく歴史の魔力に勝ち得なかつた

人である、現代の學者が其の著書論文の頭に足に若くは胴腹に惜げもなく、古今大家の名を臚列するの慣例あるは、是れも亦幾分か昔をしのぶの氣味あるが如し。

歴史は人の視角を誤る、小を大に見せ、低きを高く見せ、賤しきを貴くに見せ、馬鹿を賢く見せ、小人を豪傑に見せる、歴史は猫を虎とし、蚯蚓を龍とし、針を棒とし、蟻埴を富士山よりも高からしむるの魔力を有す、寶永四年富士山破裂の折、全山悉く吹飛ばされて、少しの跡形も存せざりしならんには、唯た歴史上に残つた富士山は現在の富士山よりは更らに何十倍も高大にして、須彌山にも劣らざる大名山として日本の誇りの一となつたのであらうが、山靈の爲めに幸か不幸か、今に現存して衆人の目に映するが爲めに、來て見れば聞くより低き富士の山、釋迦も孔子も斯くやあらんなど、云はれて、兎や角批評せられ、お負けに釋迦や孔子までも、引摺り出されて迷惑の至りならんも、人間の世の中の事は先づ大抵こんな様なものであつて、歴史の擴大鏡を透して視られたものは、直に肉眼を以て有形の儘を見らるゝとは雲泥の差異あることは明かである。

金利の時差論者は人間の性質は未來より現代に重きを置き、未來を現在より安

買すると云ふ事實に立脚して、其の主張を固執し居るも、歴史はそれと正反對であつて、現在は却つて多く安買せられ、遠き過去に遡れば遡るだけ高く買彼られて、數百年數千年の昔になれば如何なる事物でも非常に重大視せらるゝのである、歴史の此の魔力は社會のあらゆる方面に向つて偉大の威權を振廻はし、何でも彼でも古くさへあれば善なるものと妄信して、頑強に舊物を維持せんとするの傾向を來し、之が爲めに社會の進歩發達を阻害することも少くないのである。

我が文武睿聖なる明治大帝が憲法發布のときの勅語中に「祖宗の遺業を永久に鞏固ならしむ」云々と宣ひ、又其時の告文中にも、舊圖を保持して敢て失墜することなし云々と述べられたるは、固より當然の事であつて、我々臣子の議すべき所にあらざるも、兎に角金甌無缺の國體に關する事などは、勿論永劫變更を許さざること論を待たないのである、然れども我々臣民の家事政黨の内事若くは政府施政の方針等に於ては必ずしも舊例古格を準守するの必要はなく、變すべきは之を變し、改むべきは之を改むること當然なるべきに、歴史は此の場合に於て常に反對の作用を爲し、單に久しき以前より傳來したと云ふだけの辭柄に依つて、無意味に之を

持續することを勉め、新法新制度の實行には斷じて反對すると云ふ様な弊風あることは、歴史それ自身の證明する所であらう、一家にしても一國にしても、歴史が最も危険であるのは實に此の點である。

大阪の町奉行たりし久須美佐渡守の著はせる「浪花の風」に同地の豪商平野屋の家風を記るし、平野屋五兵衛の家は古來よりの家風を崩さず、主人の傍向にて使ふ若丁稚は今以て不斷振袖を着せりと書いてあるが、是は遠き昔の事にあらず、徳川氏の末年安政頃の話である、如何に古風の大家なりとて、又如何に主人付き勝手向の召使なりとて、丁稚小僧に平素振袖を着せて古風を誇つて居るとは、阿房の骨頂であつて、こんな風だから平野屋は其後間もなく潰れて仕舞つたのであるが、これは民間の商家には限つたことではない、堂々たる大名の家柄にても、御殿女中めきた小人輩等が舊格古例を楯に取つて、藩政の改革に反對し、あたから見るべかりし善政の目的を達せしめなかつた實例に乏しくないのである、又之を大にしては佛國のリシウリッ、マザラン等の大改革に反對して中途に之を破壊せんとしたり、王安石の新法を寄つてたかつて叩潰したり、松平越中、水野越前の大革新を半途にし

て失敗に歸せしめたるが如きは總て是れ頑冥なる因襲的舊習の勢力に據らざるはなし、世界何れの國にても古法に反し舊制に違へるを犯罪と見做せるが如き時代があつたのであるから、此の時代に於てはどんな善行美政でも歴史の承認を受けざるものは、到底失敗を免がれなかつたのである。

然れども歴史の此の恐るべき大勢力と雖も、遂に征服することの出来なかつたものは、學者識見家の理想であつたのである、學者識見家の理想は必ずしも皆絶対の真理ではなく、間違もあるべく、錯誤もあるべしと雖も、兎に角專横を極めたる歴史の鐵壁を破碎し、人間の運命を轉回して、文化發達の途を開通したるものは、唯た此の理想に外ならないのである、フリーリエー、ホウエン其他あらゆるユートピヤンの理想は所謂空想であつて、勿論現在の社會を離るゝこと遠しと雖も、空想なるが故に其の破壊力も亦隨て強大にして頑冥なる歴史の鐵壁を突き破る矛としては最も鋭利なる道具であつたのである、佛國革命の時に使用したる利器も亦空想と云へば空想であつたのであるが、此のユートピヤンの理想がなかつたならば、佛國民の運命は恐らくは今日の進歩を見るに至らなかつたであらう、佛國革命は只た

舊物を破壊したのみで、建設的には何等の效用もなかつたと云ふのが、後人の批判である。余もそう考へるのであるが、舊物の破壊と云ふことが、それ自體に偉大の功績であつたと思はるゝのである。長く存続して來たと云ふの外、更らに何の意義もない歴史の鐵壁に據つて、横暴を極めて居る古法、舊制を破壊して、新らしき進路を開くと云ふことが、建設の準備行爲の最も緊急なるものである。故に理想は其の實如何にユツトビヤンでも、生きた人間社會に缺く可らざる新陳代謝の手續を遂げしむるに必要な道具となつて居るのである。社會を單に靜的に見て居るものは兎角理想を輕視するやうな傾向あるも、之を動的に觀察するときには新らしき歴史は常に此の理想に依つて造られ、理想がなかつたならば、歴史の生命も亦なくなるのである。そこで歴史を單に古きを尙ぶ骨董品の如き死物として取扱はないようにするのが、歴史研究家の責任であらうと信ずるのである。

分業組織としての經營概念

(合理化過程として見たる經營の進化)

向井 鹿松

私は經濟組織を、之を構成する原則に従つて、市場經濟と經營經濟の二つに分ち、其意義並びに其發展上に於ける相互の關係を、三田學會雜誌第十九卷第九號に公表したことがある。私が最初此の二つを區別した動機は、前者は今日の所謂國民經濟學又は理論經濟學の研究對象となるに對して、後者は經營經濟學又は經營學の研究對象となるものであることを信じた結果である。而して此の考は今日尙私に於て變る所はない。而して此等の二つは共にそれぞれ廣く社會經濟學の一部であることはハルムス教授等と同一の考を持つてゐる。換言すれば私は經營經濟學でも理論經濟學でも共に人類の共同生活を研究するものと考へたいので